若き在宅医の育成を目指し 待望の新社屋完成

在宅と施設での看（み）取り率を高め、病院死の減少を実現させた「四日市モデル」の立役者の一人、石賀丈士理事長・院長。在宅緩和ケアをさらに推進すべく、2020年2月に完成した新社屋に込められた思いを聞いた。

◎在宅医育成のための新社屋が完成

2009年の開業以来、約2500人を自宅や施設で看取り、現在も在宅患者約400人、介護施設の重症患者約200人を訪問診療している。

中部・関西圏の在宅医育成拠点としての役割も担い、2020年7月には7人目の医師が卒業予定だ。ここを卒業した医師たちは、三重県内や愛知県を中心に、在宅医として活躍している。

より多くの在宅医やスタッフを育成する場でありたい、患者さんやご家族、ご遺族の場にしたいとの思いから、地上3階建てで延べ面積は約1800平方メートルの新社屋を建設した。

「意欲ある若手を集めるには魅力的な施設が必要。壁は全面ガラス張りで明るく、熱帯魚の水槽を設置するなどインテリアにも配慮しました。参考にしたのはIT企業のオフィスです。西日本の研修拠点として50人の在宅医を育てるのが目標です」

新社屋3階にあるオープンキッチンスタイルの広々としたカフェには、フリードリンクや卓球台を設置。2階と3階をつなぐ階段には並行して子どもたちが楽しめる滑り台も備え付けられた。

「患者さんはもちろん、ご遺族や訪問先のご家族の方などが、気軽に立ち寄れる癒やしの空間です。コーヒーでも飲みながら常駐の看護師と話し、少しでも日々の看病の疲れを癒やせればと願っています」

◎在宅での看取りを実現した「四日市モデル」

重度の患者を一手に引き受け、近隣の医療機関との役割分担が明確になったことで、開業当初75％以上あった四日市市の病院死の割合が、2017年には65％以下となった。

「四日市モデル」と呼ばれるこのシステムが確立され、各医療機関がそれぞれの役割に集中できるようになっている。

「ぎりぎりの状態で病床をやりくりしている日本の医療体制の問題が、新型コロナウイルス感染症の拡大で、一気に突きつけられた形となりました。全国の病院死が6割程度であれば、急性期病院は本来の役割に徹することができます。しかしニーズに応えるための在宅医が足りません」と、石賀氏は現状を危ぶむ。

◎働く人にもやさしく

「四日市モデル」は在宅医、訪問看護師やリハビリ職、介護士、ケアマネジャーなど、多職種連携で成り立っている。患者さんやご家族のニーズに応えるには、職種を問わず常にスキルアップが必要だという。そこで、クリニックのスタッフに限らず、四日市モデルを発展させるための多職種連携の場になるよう、70人を収容できるホールを設置。地域の活動などにも開放する予定だ。

スタッフの働き方改革にも意欲的に取り組む。当直以外の医師は、定時の午後5時で勤務が終了。残業はほぼゼロを実現している。

◎子どもたちに「いのち」を学ぶ機会を

7人の常勤医を、今後は15人程度まで増やす予定だ。理想は10人が指導し、5人が学ぶ体制。これが実現できれば、「四日市モデル」のさらなる発展へとつながっていく。

法人のビジョンとは別に個人的な思いが石賀氏にはある。「在宅での看取りを普及させる目的の一つは、命の大切さを子どもたちに肌で感じてもらうこと。これまで〝死〟が、病院に閉じ込められたために、死ぬことや命の大切さを、よく理解できない子どもが増えています」

2017年に始まった「いのちの授業」は十数回になる。「彼らが大人になる頃には、在宅での看取りが、当たり前の世の中になっていてほしいですね」

①ガラス張りの壁、IT企業のオフィスをイメージした新社屋　②患者家族などが自由に利用できる3階のオープンキッチンスタイルのカフェ　③石賀丈士理事長・院長

医療法人SIRIUS いしが在宅ケアクリニック
三重県四日市市山城町749―37　☎059―336―2404（代表）
http://www.ishiga-cl.com/